

山谷でホスピス
始めました

山本 雅基著

「きぼうのいえ」の無謀な試み

医療保険も介護保険も財政危機に瀕している時代に「ホームレス」に手厚い医療と介護を施すことには複雑な市民感情もあるだろう。だが、東京・山谷のドヤ街には末期がんのホームレスや生活保護受給者のためのホスピスがある。「きぼうのいえ」だ。クリスチャンの山本雅基さん(43歳)が1億2千万円の借金をして開設した。

書評

ホームレスの
末期癌患者をみとる



診と訪問看護を提供する集合住宅型の在宅ホスピスである。

ハーブの生演奏で癒しと鎮静を行うミュージック・セラピーを日本ですべて初めて実施した。本書は、徒手空拳で人のまねができない「無謀な家」づくりを看護師の妻と二人三脚でやってのけた自称「元ニート」の悪戦苦闘と喜怒哀楽の物語である。入居者は孤独で強(したた)か。頑固で、狡猾な、「凍土」

のような心の持ち主たちをケアし看取る介護スタッフは、患者の弱者の部分の大きき見すぎてバーンアウトしかねない。「天使の真似をしようとする者は悪魔のようになる」気分も実感した。無理難題とトラブルの巣窟で24時間365日、施設長としての重責に耐えかねて何度も倒れ、ひそかに患者の死が早まるように望んでいる「もうひとり自分」に気づいたこともあるからだ。

3年半で看取った人々は34人。墓地まで用意してきた。だが、死ぬ前に「ありがとう」と言い残す人は滅多にいない。ここに來る人たちは、みな人生に負けた「生きることが不器用な人」だから。

この世には「ほんの小さなつまずきで人生を棒に振ってしまふような人」が張り巡らされて

評・尾崎 雄 (老・病・死を考える会世話人)

いる。「そういう人たちこそ、人生の最後に、生きる希望を取り戻し、悲しみを癒し、希望とともに次のステージ、すなわち死の世界に進んでいくための場所が必要」なのである。確かにその通りだが、そう信じていること、それを実行することはまったく違う。

公的な補助金はいっさい受けないため、月々発生する赤字は半端な額ではすまない。キリスト教関係者からの寄付などによって経営はかろうじて支えられている。それにしても、なぜ、こんな無謀なことを始めたのか? 「路上で病み倒れている人を見ると、一つ間違えば自分もあのようになっていたかもしれないと思うから」である。

(実業之日本社・四六判・288頁・1680円)